

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	フランス語における名詞句+従属節型感嘆文について
Author(s)	金子, 真
Citation	フランス文学, 25 : 12 - 24
Issue Date	2005-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041066
Right	
Relation	



フランス語における名詞句＋従属節型感嘆文について

金子 真

1. はじめに

フランス語には、例文(1)、(2)のように、名詞句＋従属節という形で現われ、感嘆、驚きなどを表わす文が存在する。例えば(1)は「彼女の持つ声（の素晴らしさ）の程度」についての感嘆を表し、(2)は「亡くなったのが（他でもなく）ミシェル氏であること」に対する驚き、意外感を表わす。¹⁾

- (1) La voix qu'elle a ! (映画DIVAのシナリオ / 山本 2004: 2)
- (2) Ah ! Mon dieu ! [...] Monsieur Michel qui est mort ! (SANDFELD 1965: 155)
- (3) «Ici, rien n' est omis. [...] le plus souvent, elle [l'exclamation] marque un désaccord ou contraste avec une situation ou un fait présent» (ibid.)
- (4) «Ces conjonctives [= (2) タイプの構文] sont [...] des principales sans aucune dépendance avec une autre proposition. [Elles expriment] la valeur fortement affective de la phrase (étonnement, regret, vive opposition, etc.)» (LE BIDOÏD & LE BIDOÏD 1971: 379)

このうち程度に関する感嘆を表わす(1)タイプは、英語にも対応する構文が存在することもあり、GÉRARD (1980) を始めとして感嘆文に関する多くの先行研究で論じられているが、意外感を表わす(2)タイプについてはこれまで感嘆文として分析されることはあまりなく、十分に研究が進んでいるとは言えない。そうした数少ない先行研究の中では、SANDFELD (1965) と LE BIDOÏD & LE BIDOÏD (1971) が、引用(3)、(4)にみられるように、(2)タイプの構文を、省略を含む従属節ではなく独立した主節であり、話者が当面する事態に対する不満足、意外感などの感嘆 (exclamations) を表す文である、と論じている。ただしどちらの研究も、そうした情意的価値がどのようにして生じるのか、また(1)タイプの構文とどのような関係をもつのかについて、考察を行っていない。

ところで(1)タイプの感嘆文について、ZANUTTINI & PORTNER (2003) は意味的には(5)のようなWH感嘆文と同様に分析できる、と提案している。また彼らの意味論的分析と非常に似通った分析を、沼田 (2000) が、(6)のような、日本語の取り立

て詞「なんか」を含む意外感、不満を表わす構文に対し提案している。

(5) Quelle voix (elle a) !

(6) よりにもよって、太郎なんかが僕の誕生パーティーにやってきた。

(沼田2000: 195)

本稿ではこれらの研究に示唆を得て、(2)タイプの意外感を表わす構文は、(6)のような日本語の構文と意味的に平行的に分析できる、という仮説を提案する。またさらに、ZANUTTINI & PORTNER と沼田の分析では十分な考察がなされていない点を指摘し、(1)、(2)、(5)、(6)の構文を修辞疑問文と同様に分析することでそうした不十分な点を補うことができると主張する。

以下、2節で ZANUTTINI & PORTNER による(1)と(5)のような感嘆文の分析を、次に3節で沼田による(6)タイプの構文の分析を紹介し、同時にこれらの分析の不十分な点も指摘する。続いて4節で、修辞疑問文を意味論的・語用論的観点から分析した HAN (2002) の提案を紹介し、5節で、2節と3節で指摘した問題点が、HAN の分析を援用することによって解消すると論じる。5節ではさらに、フランス語の(2)タイプの構文と日本語の(6)タイプの構文を焦点化構文として平行的に分析することを提案する。

2. 程度に関わる感嘆文：ZANUTTINI & PORTNER (2003)

ZANUTTINI & PORTNER (2003: 40) は、例文(5)のような WH 句 (quelle など) を含む感嘆文の統語構造について、イタリア語パドヴァ方言で WH 句とは別に補文標識が現われることを参考に、i) CP に位置する WH operator による変項の束縛を含む、ii) WH operator が位置するのとは別の投射に FACT (factive operator) を含む、という提案を行っている。この提案に従えば、(5)の統語構造は(7)により表示される。

(7) $[_{CP1} [quelle (WH) voix]_k [_{CP2} FACT [_{IP} elle a t_k]]]$

(ZANUTTINI&PORTNER 2003: 64参照)

(8) $[_{DP} la (FACT) [_{CP} [_{NP} voix WH]_k [_C que [_{IP} elle a t_k]]]]]$

(PORTNER & ZANUTTINI 近刊参照)

PORTNER & ZANUTTINI (近刊) はまた、(1)のような構文を先行詞+関係節と分析し、関係節内の WH operator が、(5)のような感嘆文の WH 句と同様の機能を果たすと

主張する。実際関係節とは、先行詞が表わす属性と従属節が表わす属性（例文(1)ではそれぞれ $\lambda x(\text{Voix}(x))$ と $\lambda x((\text{Avoir}(\text{elle}, x)))$ の共通部分を、関係代名詞に相当する WH operator が検索するものである。さらに彼らの分析によると、通常の制限関係節では、その共通部分に定冠詞が唯一の値を与えるが、(1)のような感嘆文では、定冠詞は2つの命題の共通部分が存在するという前提 (factivity) を示すだけで、その共通部分に明確な値を与える働きをしない、言い換えれば、(1)のような名詞的感嘆文の定冠詞は、WH 感嘆文の factive operator と同様の働きをしている。こうした彼らの提案に従えば、(1)の統語構造は(8)によって表わされる。²⁾

ZANUTTINI & PORTNER (2003 : 52) はさらに、疑問文を真の答えの集合 (set of true answers) とする分析に示唆を得て、統語的特性 i) のため内部に値が未決定の変項を含む感嘆文は、意味論的に命題ではなく命題の集合を表わす、と論じている。また統語的特性 ii) から、感嘆文の命題内容は真であると前提される、すなわち叙述的 (factive) である。従ってモデル M と可能世界 w における(1)と(5)の意味はどちらも、(9)と(10)により表示される。

$$(9) \quad [[\text{quelle voix elle a}]]^{M,g,w} = [[\text{la voix qu'elle a}]]^{M,g,w} \\ = \{p : w \in p \wedge \exists x [p = \{w : \text{Voice}(x) \text{ in } w \wedge \text{Have}(\text{she}, x) \text{ in } w\}]\} \\ \text{[set of propositions]}$$

(ZANUTTINI & PORTNER 2003: 52とPORTNER & ZANUTTINI近刊参照)

$$(10) \quad w_0 \in p \leftrightarrow V_{M,w_0} [\exists x (\text{Voice}(x) \text{ in } w_0 \wedge \text{Have}(\text{she}, x) \text{ in } w_0)] = 1 \\ \text{[factivity]}$$

命題を可能世界の集合と考えると、(9)は、命題 p の集合「可能世界 w で彼女が彼女が(素晴らしい)声 x を持つ」を表わす。(10)は「現実世界 w₀で命題 p が真である」、すなわち「彼女の(素晴らしい)声に対する適当な値が見つかる」ことを表わす。

ZANUTTINI & PORTNER はさらに、命題の集合という意味からどのようにして感嘆の意味が生じるのかについて、(11)のような説明を提案している。

(11) « the WH phrase binds a variable for which an appropriate value cannot be found in the contextually given domain. In order to find the appropriate value, one must look outside of the domain »

(ZANUTTINI & PORTNER 2003: 50)

$$(12) \quad \neg \exists p (p \in D1 \wedge w \in p \wedge \exists x [p = \{w : \text{Voice}(x) \text{ in } w \wedge \text{Have}(\text{she}, x) \text{ in } w\}])$$

この提案によれば、感嘆文が発せられる時には、文脈上関与的な命題の集合からなる初期領域 (DIで表わす) が存在している。そして現実世界 w_0 の事例に対応する適切な命題が DI内に存在しているか、話者自身が探索を行う (疑問文では探索は聞き手に委ねられる)。このように DI内の探索を行うのが WH operator であるが、検索の結果、DI内には適切な値を含む命題が存在しないことがわかり、外部へ探索を向けざるを得なくなる。このことを彼らは widening という用語を使って表わしている。驚き、詠嘆などの意味は、このように DI内に適切な値が見つからないことから生じる。この widening という概念を明示的に表現すると(12)のようになる。(12)は DI内に「可能世界 w において彼女が (素晴らしい) 声 x をもつ」が真となるような命題 p が存在しないこと、すなわち「彼女の持つ声 (の素晴らしさ)」が、話者の想定を超えていることを表わす。

このように ZANUTTINI & PORTNER の分析は、感嘆の意味がどのように生じるのかについて明示的な説明を可能にする。しかし構文と結びついた字義通りの意味としては、命題の集合と factivity しか表わさない感嘆文が、どのようにして widening という否定を含んだ意味を担うことができるのか、彼ら自身は明らかにしていない。

3. 否定的特立を表わす焦点化構文：沼田 (2000)

沼田 (2000) は、ZANUTTINI & PORTNER による WH 感嘆文の分析と基本的に同趣旨の分析を、(13)のような、日本語の取り立て詞「なんか」を含む文に対して提案している。

(13) よりにもよって、太郎なんかが僕の誕生パーティーにやってきた。

(沼田2000: 195)

- a. 主張：断定・自者－肯定³⁾
- b. 含み：想定・自者－否定 / 他者－肯定、二次的特徴：想定は評価を含む

沼田は、(13)の意味を「『太郎が僕の誕生パーティーにやってきた』という文が真となることの適切性が、『そんなことは起こるべきではない』と話し手によって否定されている [...]『太郎』が、『僕の誕生パーティーにやってきた』の中で、特に否定的に特立されている」(p.196) と説明し、これを (13a,b) によって表示する。この分析を敷衍すると、(13)における「なんか」の働きは、焦点「太郎」が、適切と想定される事例の集合の中に存在するかどうか検索することである。そして「太郎」が集合の中に見つからないため、意外感及び不適切であるという意味が生じる。

ところで取り立て詞 (「なんか」以外では「だけ」、「さえ」等) とは、文中の

焦点項目と結びついて様々な意味を表わす形式であるが、これは意味論の分野で focus particle と呼ばれるもの (英語では only, even 等) に相当する。ROOTH (1996: 276) は、焦点と focus particle の結びつきを捉えるためにまず、焦点の意味論的機能は他の選択肢 (alternatives) を喚起することであるとする。こうした観点から彼は、焦点は ordinary semantic value と focus semantic value の2つの価値を持つ、と提案する。前者は焦点項目を含む命題、後者は焦点項目を変項に置き換えた命題の集合である。例えば ROOTH の分析に従えば、「太郎」に焦点が置かれた «TARO came to the party» という文の2つの価値は、(14)と(15)によって表示される。

- (14) $[[[\text{TARO}]_{\text{F(OCUS)}} \text{ came to the party}]]^{\text{o(ordinary)}}$
 $= p = \{w: \text{Come-to-the-party (t) in } w\}^4)$
- (15) $[[[\text{TARO}]_{\text{F}} \text{ came to the party}]]^{\text{f(ocus)}}$
 $= \{p: w \in p \wedge p = \{w: \text{Come-to-the-party (x) in } w\}\}$

(14)は、可能世界 w における命題「太郎がパーティーに来た」を表し、(15)は、可能世界 w における命題の集合「 x がパーティーに来た」を表わす。

ただし alternatives となるのは、焦点項目を変項に置き換えた全ての命題ではなく、文脈上関与的なものに限られる。そこで文脈上関与的な focus semantic value を C (context の略) で表わすと、例えば focus particle «only» の一般的な意味は「 C の中に真である命題があれば、それは ordinary semantic value である」とまとめられる。例えば(16)の only が焦点と結びついて表わす意味は(17)によって表示される。

- (16) Only TARO came to the party.
- (17) $\{w: \forall p (p \in C \wedge C = [[[\text{Taro}]_{\text{F}} \text{ came to the party in } w]]^{\text{f}} \wedge w \in p \rightarrow p = [[[\text{Taro}]_{\text{F}} \text{ came to the party in } w]]^{\text{o}})\}$

(17)は「全ての文脈上関与的な focus semantic value、すなわち命題 p の集合「 x がパーティーに来た」について、もし p が真であるならば、 p は ordinary semantic value 「太郎がパーティーに来た」である、すなわち x は太郎である」ことを示す。

この考え方に従うと、(13a,b) が表わす「なんか」の主張と否定的特立の含みは、それぞれ、「現実世界 w_0 において、ordinary semantic value 「太郎がパーティーに来た」が真である」こと、「現実世界 w_0 以外の話者の想定を表わす可能世界 w において、文脈上関与的な focus semantic value、すなわち命題の集合「 x がパーティーに来た」の中に、ordinary semantic value が存在しない」こととまとめら

れる。これらは(18), (19)で明示的に表現される。

- (18) $w_0 \in p \leftrightarrow [[[\text{Taro}]_F \text{ came to the party in } w]]^0$
 $= V_{M, w_0} (\text{Come-to-the-party } (t)) = 1$ [(13a) の主張]
- (19) $\neg \exists p (w \neq w_0 \wedge w \in p \wedge p \in C \wedge C = \{p: p = \{w: \text{Come-to-the-party } (x) \text{ in } w\} \wedge x = t\})$ [(13b) の否定的特立の含み]
- (20) $[[[\text{Taro}]_F \text{ came to the party in } w]]^1$
 $= C = \{p: w \in p \wedge p = \{w: \text{Come-to-the-party } (x) \text{ in } w\}$ [set of propositions]

しかし一方、「なんか」を WH operator に相当すると考えると、(13)から(18)の主張部分を取り除いて字義通りに得られる意味は、(20)で示されるように、「可能世界 w において、なんかがパーティーに来た」こと、すなわち命題 p の集合「 w において、 x がパーティーに来た」こと（文脈上関与的な focus semantic value）でしかない。つまり、2節で見たように、ZANUTTINI & PORTNER が WH 感嘆文の widening という意味を、字義通りの意味から直接導くことができなかつたのと同様、沼田が指摘する否定的特立という意味は、字義通りの意味からは直接に導くことができない。次節では、この2つの問題を解消する手がかりとして、修辞疑問文の意味が生じる仕組みについて検討する。

4. 修辞疑問文：HAN (2000)

WH 感嘆文と「なんか」を含む文と同様、修辞疑問文も字義通りには命題の集合を表わすが、実質的には否定文を表わす。例えば、(21)が修辞疑問文と解釈される場合、字義どおりには命題の集合(21a)を表わすが、実質的には(21b)または(21b')のように、候補となる集合の中に答えが存在しないことを表わす。修辞疑問文が否定を含むことは、(22)が示すとおり、英語の「lift a finger」のような強い否定極性項目と共起することからも裏付けられる。

- (21) Who finished the paper? (HAN 2002: 217)
- a. $[[[\text{Who finished the paper?}]]^{M, g, w} = \{p: w \in p \wedge \exists x [p = \{w: \text{Person } (x) \text{ in } w \wedge \text{Finish-the-paper } (x) \text{ in } w\}]]$
- b. $\neg \exists x (\text{Person } (x) \wedge \text{Finish-the-paper } (x))$ (HAN 2002: 220を参照)
- b' $\neg \exists p (w \in p \wedge \exists x [p = \{w: \text{Person } (x) \text{ in } w \wedge \text{Finish-the-paper } (x) \text{ in } w\}])$ ⁵⁾
- (22) Who lifted a finger to help Mary? (HAN 2002: 205)

HAN (2002) は、どのようにして命題の集合(21a)から、(21b), (21b')のような否定の意味が生じるのかについて、意味論的な疑問文の分析と、語用論的な GRICE の会話の公理を援用し、次のような説明を提案する。2節で見たように、ZANUTTINI & PORTNER は感嘆文を命題の集合と分析するにあたって、疑問文を真の答えの集合 (set of true answers) とする見解に従っている。一方 HAN は、疑問文は可能な答えの集合 (set of possible answers) であり、その中には偽の答えも含まれるとする見解をとる。この見解によれば、2人のメンバー {Marie, Anne} からなるモデル M において、(21)が通常の疑問文と解釈された場合の可能な答えは、{ \emptyset , Marie, Anne, {Marie, Anne}} という集合からなる。するとモデル M における疑問文の外延的意味は、(23)のような4つの命題の集合で表わされる。

- (23) [[who finished the paper]]^{M,g,w} = {no one finished the paper in w, Marie finished the paper in w, Anne finished the paper in w, Marie and Anne finished the paper in w}

一方従来から指摘されてきたように、修辞疑問文は実は命題の集合ではなく1つの命題(話者の断定)を表わす。このことは通常の疑問文とのイントネーションなどの違いから裏付けられる。すると修辞疑問文の問題は、なぜ WH 疑問文が意味論的に表わす命題の集合の中で、他の命題ではなく否定命題、例えば(23)においては「wにおいて誰も論文を終えなかった」が選ばれるのか、と言う問題に帰着する。

ところで GRICE の「量の公理」は、談話のある時点において発話の情報価値が最大であることを要請する。話者にとって最も価値が高い情報とは、自分の予測に反する情報である。また HAN (2002: 215) によれば、話者は疑問文を発するにあたって、もしそれが真であれば最も情報価値が高い形、すなわち自分の予測に最も反する形を選択する。例えば話者が肯定疑問文「雨が降るだろうか？」と否定疑問文「雨が降らないだろうか？」のどちらを選択するかにあたって、雨が降る可能性が高いと考えている場合は後者を、晴れると考えている場合には前者を選ぶ。以上の考察からすると、肯定 WH 疑問文(21)を用いる時には、話者は「wにおいて論文を終えている人は多くない」、と想定していることになる。修辞疑問文の場合、さらに話者の信念に最も合致する1つの命題、すなわち「wにおいて誰も論文を終えなかった」が選ばれ、否定の意味が生じる。

5. 提 案

本節ではまず5.1.節、5.2節で、これまでの考察をふまえ、WH感嘆文が表わす widening と取り立て詞「なんか」を含む文が表わす否定的特立は、修辞疑問文が実質的に否定文を表わすのと同様、GRICEの「量の公理」に従って語用論的に生じると提案する。次に5.3.節で、本稿冒頭で見た(2)タイプの構文に対し、新たな分析を提案する。

5.1. widening 再考

2節で見たようにWH感嘆文(24)は、(24a)のように、「現実世界 w_0 において、彼女の(素晴らしい)声に対応する適当な値が見つかる」ことを含意する。そしてその字義通りの意味は、(24b)が示すように命題の集合である。しかし実質的には、(24c)のように「現実世界 w_0 以外の可能世界 w において、(24a)が(24b)に属さない」ことを表わす。ここで例えば素晴らしさの程度の集合 $\{d_1, d_2, \dots, d_k\}$ を含むモデル M における、(24a)~(24c)の外延的意味は、(24a')~(24c')によって表わすことができる。

(24) Quelle voix elle a !

a. $w_0 \in p \leftrightarrow V_{M, w_0} (\exists x (\text{Voice}(x) \text{ in } w_0 \wedge \text{Have}(she, x) \text{ in } w_0)) = 1$

b. $\{p: w \in p \wedge \exists x [p = \{w: \text{Voice}(x) \text{ in } w \wedge \text{Have}(she, x) \text{ in } w\}]\}$

c. $\neg \exists p (w_0 \neq w \wedge p \in D_1 \wedge w \in p \wedge \exists x [p = \{w: \text{Voice}(x) \text{ in } w \wedge \text{Have}(she, x) \text{ in } w\}])$

a'. $[[(24a)]]^{M, g, w_0} = \{w_0 \text{において彼女は} dk \text{の声を持つ}\}$

b'. $[[(24b)]]^{M, g, w} = \{w \text{において彼女は} d_1 \text{の声を持つ, } w \text{において彼女は} d_2 \text{の声をもつ..., } w \text{において彼女は} dk \text{の声を持つ}\}$

c'. $[[(24c)]]^{M, g, w_0} = \{w \text{において彼女は} d_1 \text{の声を持つ, } w \text{において彼女は} d_2 \text{の声を持つ, ..., } w \text{において彼女は} dk-1 \text{の声を持つ}\} \text{ただし } w_0 \neq w$

ところで「量の公理」は発話の情報価が最大であることを要求する。(24a')と(24b')を同時に述べる時、もし w_0 が w に含まれれば(24a')は(24b')が表わす集合の1要素に過ぎなくなり情報価を失う。従って語用論的に w_0 が w に含まれないという意味が生じる。さらに、(24a')の情報価が最大になるのは、 w_0 以外の可能世界 w では「彼女は dk の声を持つ」が偽である時である。このようにして(24c')の意味が生じる。これを一般化すれば(24a)と(24b)から(24c)が生じることになる。

WH 感嘆文も修辭疑問文と同様實際は否定命題を表わすという仮説は、どちらもある種の不定冠詞と共起可能であることから裏付けられる。先に(22)に示したように、修辭疑問文は「lift a finger」などにみられる否定極性項目 a (日本語では「ひとつも～ない」に対応)を許容する。ところで英語の WH 感嘆文と WH 疑問文の違いは、(25)に見られるように感嘆文では WH 句中に不定冠詞 a を許容することである。ZANUTTINI & PORTNER (2003: 50, 注15) は、この不定冠詞を(26)に見られるような否定極性項目 a と同様に分析する可能性を提案している。もし ZANUTTINI & PORTNER の提案が正しいならば、感嘆文も否定極性項目を認可するような否定辞を、あるレベルで含むことになる。

(25) What a beautiful voice she has !

(26) She didn't say a word. (ZANUTTINI & PORTNER 2003: 50, 注15)

5.2. 否定的特立再考

3節で見たように(27)は、(27a)が表わすとおり、現実世界 w_0 において ordinary semantic value 「太郎がパーティーに来た」が真であることを主張する。その字義通りの含みは(27b)が示すように「可能世界 w において、なんかがパーティーに来た」こと、すなわち文脈上関与的な命題の集合 (focus semantic value) である。しかし実質的には(27c)のように「現実世界 w_0 以外の可能世界 w において、(27a)が(27b)に属さない」ことを表わす。ここで例えば {太郎, 次郎} という2人のメンバーを含むモデル M におけるそれぞれの外延的意味は、(27a')-(27c')によって表わされる。

(27) 太郎なんかがパーティーに来た。

a. $w_0 \in p \leftrightarrow [[[\text{Taro}]_f \text{ came to the party in } w]]^0$
 $= V_{M, w_0} (\text{Come-to-the-party } (t)) = 1$

b. $[[[\text{Taro}]_f \text{ came to the party in } w]]^1$
 $= C = \{p: w \in p \wedge p = \{w: \text{Come-to-the-party } (x) \text{ in } w\}\}$

c. $\neg \exists p (w_0 \neq w \wedge p \in C \wedge C = \{p: p = \{w: \text{Come-to-the-party } (x) \text{ in } w\}\} \wedge x = t \wedge w \in p)$

a'. $[[[\text{(27a)}]]]^{M, g, w_0} = \{w_0 \text{ において太郎が来た}\}$

b'. $[[[\text{(27b)}]]]^{M, g, w} = \{w \text{ において太郎が来た, } w \text{ において次郎が来た}\}$

c'. $[[[\text{(27c)}]]]^{M, g, w} = \{w \text{ において次郎が来た}\}$ ただし $w_0 \neq w$

(27a')と(27b')を同時に述べる時、感嘆文の場合と同様、もし w_0 が w に含まれれば(27a')は(27b')が表わす集合の1要素に過ぎなくなり情報価を失う。従って「量の公理」から語用論的に w_0 が w に含まれないという意味が生じる。さらに、(27a')の情報価が最大になるのは、 w_0 以外の可能世界 w では「太郎が来た」が偽である時である。このようにして、(27c)の意味が生じる。

否定的特立の取り立て詞と修辞疑問文を平行的に捉えるこの分析は、次の現象からも裏付けられる。3節で見た沼田による表示(13b)の中でも述べられているように、否定的特立の取り立て詞は「そうあるべきではない」という否定的評価を含む。ところで修辞疑問文の中にも、同様の否定的評価を含む(28), (29)のような例が見られる。これらの例では、日本語の「なに」にあたる、通常主語・目的語の項位置に現われる疑問詞が、動詞の必須項が全て埋まった環境において、非項位置に用いられている。そして日本語訳からもうかがえるように、反語的な「なぜ」にあたる意味(「そうする理由はない」)を表わす。

(28) *Que tardez-vous ?!* (MUNARO & OBENAUER 2002 : 12) 「何を遅れているんだ」

(29) *Was schaust du mich so an ?!* (idem.15) [ドイツ語]

quoi regardes tu me ainsi 「(お前は) 何を私を そんな風に見てるんだ」

MUNARO & OBENAUER (2002) は、「なに」にあたる語が、相手に情報を問う疑問詞から反語的理由を表わす意味に拡張して用いられるという現象が、様々な言語で共通して見られることに着目し、その理由を、これらの疑問詞が元々、意味素性上他の疑問詞よりも貧弱であるからだと説明している。例えばフランス語では、*qui* や *pourquoi* が [+human] や [+reason] という積極的な価値を持つのに大して、通常の疑問詞用法の *que* は [-human], [-reason] という消極的な価値しか持たない。MUNARO & OBENAUER はまた、(28), (29) のような非項用法においては、元々意味素性が貧弱な疑問詞が、さらに意味的弱化を受け、例えば *que* では [-reason] という意味的制約も失われていると指摘している。

同様の指摘は、否定的取り立て詞「なんか」にも成り立つ。「なんか」に含まれる疑問詞(不定語)「なに」は元々 [-human], [-place], [-time] といった貧弱な素性しか持たないが、否定的特立用法では、(27)や「東京になんか行かない」、「6時になんか起きない」といった例が示すように、これらの制約さえ失われている。こうした共通点は、否定的特立の「なんか」を、ある種の修辞的疑問詞を含む形式と同様に分析する仮説を裏付けるように思われる。

5.3. 意外感を表わす名詞句＋従属節型構文

先に見たように、ZANUTTINI & PORTNER は、(30)のような構文は先行詞＋関係節であり、(31)のような WH 感嘆文中の WH 句と同様の機能を果たす、空の WH operator を含むと分析している。また沼田の分析を敷衍すると、(32)の「なんか」は WH operator としての役割を担うと考えられる。本節ではさらに、(33)のような構文は焦点化構文（強調構文）であり、(32)の「なんか」と同様の空の WH operator を含む、と提案する。

(30) La voix (WH op) qu'elle a !

(31) Quelle voix elle a !

(32) 太郎なんかがパーティーに来た。

(33) Michel (WH op) qui est mort !

a. $[_{FocP} \text{ Michel } [_{Foc} (\text{Foc}) [_{CP} \text{ Wh Op } [\text{qui t est mort}]]]]$.

b. $w_0 \in p \leftrightarrow [[\text{Michel est mort}]]^{M, g, w_0} = V_{M, w_0} (\text{Dead } (m) \text{ in } w_0) = 1$ [主張]

c. $[[\text{qui est mort}]]^{M, g, w} = \{p: w \in p \wedge p = \{w: \text{Dead } (x) \text{ in } w\}$

[set of propositions]

d. $\neg \exists p (w_0 \neq w \wedge p \in C \wedge C = \{p: p = \{w: \text{Dead } (x) \text{ in } w\}\} \wedge x = m \wedge w \in p)$

[否定的特立]

(34) JOHNSON died. (LAMBRECHT 1994: 309)

この分析によれば、(33)の統語構造は(33a)で表わされ、その意味は字義通りには、(33b)の「現実世界 w_0 でミシェルが亡くなった」という命題と、(33c)の「可能世界 w で x が亡くなった」という命題の集合であるが、語用論的原則に合致するように、「現実世界以外の可能世界、すなわち話者の想定世界において、命題(33b)が命題の集合(33c)に含まれない」という(33d)の意味が生じることになる。

(33)のような構文を、(32)のような日本語の語彙的焦点化構文と平行的に、統語的焦点化構文とするこの分析は、両者が驚き、意外感という共通の意味を表わすことを自然に説明できる。またさらに、(34)のような英語の強勢アクセントを用いた焦点化構文も似通った意味を表すことも同様に説明できる。

以上の提案が正しいならば、命題の集合を、日本語は WH 句を含む「なんか」によって語彙的に表現し、WH 句が非明示的なフランス語は、集合から 1 つの値を特定する機能を果たす主文 *c'est* が不在であることによって表現していると言える。こうして本節の提案は、(2)タイプの構文では主文の不在が積極的な意味を担っており、本来は存在するものが省略されたのではない、という 1 節でみた伝統文法家の直感

を、明示的に説明することを可能にする。

6. まとめ

本稿では主に次の2つのことを主張した。i) (1)タイプの名詞句+従属節が、(5)タイプのWH感嘆文と同じ意味を表わす先行詞+関係節であるのに対し、(2)タイプの名詞句+従属節は、(6)タイプの「なんか」を含む文と同様、否定的特立を表わす焦点化構文である。ii) これら4つの構文に見られる、字義通りの意味と実際に表わす意味との間の食い違いは、修辞疑問文における食い違いと同様、GRICEの「量の公理」により説明できる。

注

- 1) この構文は、単一判断として、出来事に対する意外感、驚きを表わすこともできる。本稿では紙面の都合から、こうした単一判断用法については検討しない。
- 2) この構造では、先行詞DPに関係節CPが付加するのではなく、NPはSpec-CPに位置し、NP+関係節全体がCPを構成する、という分析がとられている。
- 3) 「自者」とは、文中に明示的に表現されている項目((13)では「太郎」)を指し、「他者」とは、それと範列的な関係をなす項目(例えば「次郎」、「花子」など)を指す。
- 4) 本稿では、焦点の定義は内包的でなければならないというKADMON(2001: 293-294)の指摘に従って、焦点を真理値でなく命題、すなわち可能世界の集合を用いて定義する。
- 5) (21b')は要素の存在を否定する文(24b)を、命題の否定となるように書き換えたものである。

参考文献

- HAN, C.-h. 2002, «Interpreting interrogatives as rhetorical questions», *Lingua* 112: 201-229.
- GÉRARD, J. 1980, *L'exclamation en français*, Niemeyer.
- KADMON, N. 2001, *Formal Pragmatics*, Blackwell.
- LAMBRECHT, K. 1994, *Information Structure and Sentence Forms*, Cambridge Univ. Press.
- LE BIDOID, G. & LE BIDOID, R. 1971, *Syntaxe du français moderne, ses fondements historiques et psychologiques*, tome 2. Picard.
- MUNARO, N. & OBENAUER, H.-G. 2002, «On the semantic widening of underspecified wh- elements», in LEONETTI, M. et al. (ed), *Current Issues in*

Generative Grammar, Universidad de Alcalá / Universidad Autónoma de Madrid.

沼田善子 2000, 「とりたて」, 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (著), 『時・否定と取り立て』, 岩波書店: 151-216

PORTNER, P. & ZANUTTINI, R. 近刊, «Nominal exclamatives in English», in STAIN-
TON, R. & ELUGARDO, R. (eds), *Ellipsis and non-sentential speech*,
Kluwer.

ROOTH, M. 1996, «FOCUS», in LAPPIN, S. (ed). *The handbook of contemporary
semantic theory*, Blackwell: 271-297.

SANDFELD, K. 1965, *Syntaxe du français contemporain 2 : Les propositions su-
bordonnées*, Droz.

山本大地 2004 「フランス語の感嘆文について」 日本フランス語学会第220回例会発
表ハンドアウト

ZANUTTINI, R. & PORTNER, P. 2003, «Exclamative Clauses: at the Syntax-Seman-
tics Interface», *Language* 79. 1: 39-81.